
【零の軌跡 / 碧の軌跡】漢字 1 文字 × 5 つのお題

東雲涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【零の軌跡／碧の軌跡】漢字1文字×5つのお題

【Nコード】

N5363Z

【作者名】

東雲涼

【あらすじ】

pixivにて公開されている、紗英さんの作品（<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=655037>）のお題をお借りして、SSを書かせて頂きました。

お題のルールは以下の二つ。

- ルール1：お題は漢字1文字（『零』『碧』『紅』『銃』『鐘』）
- ルール2：一話500字以内

(pixiv に上げたこちら ↓ <http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=680868>) の
作品と同一のものです。

『零』

『バラエティ豊かな仕事を山ほど回してやるから、楽しみにしてる
といい——』

「とか言ってたな、課長」

「あの不良中年。そんなの有言実行しなくていいっての!」

「お静かに、ランディさん」

「警察を身近に感じて貰うための、これも大事な任務なのよ」

「何で俺がこんな不細工な着ぐるみを……。代われ、ロイド!」

「それよりもこのデザインは、まさか……」

「ああそれか。なんでも、ツアイトをモデルに、みっしい風のゆる
キャラを目指したって」

「パクリかよ!？」

「狙い過ぎてるわね……」

「二重の冒涇です! 許せません!」

「え、ちょ、待てティオすけ!」

「——アイシクルエッジ!」

「「あつ」」

「ふう。悪は滅びました」

「……くおらティオすけ! 何しやがる!」

「中身は無傷ですね。さすがランディさん」

「こ、壊れたな、被り物」

「この後マスコットの出番なのに」

「問題ありません。ツアイト、来て!」

「ウォン」

「……ある意味、正しい気がするわ」

「仕方ない、それで行こう」

「最初っからそうしろっつの……」

『イベント出演要請』

評価DP:3pt(+2)

報酬:2000ミラ:ただし弁償代で差し引き0

『碧』

「俺は機能重視だな。これ見た目より色々仕込めるし。そういう意味じゃ、テイオすけも同じだろ？」

「ええ、まあ。エイオンシステムのユニットをあちこちに装着する必要がありますから」

「私はデザインも重視したわ。どこで誰と会うか分からないし」

「ああ、マリアベルさんとかな」

「マクダエル市長の体面もありそうですしね」

「でも、やっぱり最後は動きやすさで決めたわね。競技会に出た時を思い出したりして」

「ロイドさんは、どうですか？」

「俺？ 俺のは、殆ど兄貴のを真似ただけだからなあ」

「はは、背伸びしたいお年頃ってやつか」

「うっ……否定はしないけど」

「ふふ。よほど憧れていたのね」

「ああ——でも色は、自分でこれが気に入って選んだな。兄貴は黒がほとんどだったけど」

「そういえば、そうでしたね」

「青が好きだとか、お前どんだけ爽やかなんだよ」

「なんなら交換してみるか？」

「いや、いい。俺はその色似合わねえから」

「似合わないというよりも——」

「それはもうロイドさんの色です」

「ま、そういうこったな」

「……ありがとう」

「「「「？」」」」」

晴れた日の空の色には

未来と希望が見える気がする

『銃』

「ダドリーさん、ちょっとよろしいですか」

「なんだ、プラトー」

「以前から不思議に思っていたのですが、ダドリーさんの武器はなんですか？」

「それは比喻か？」

「いえ、文字通りの意味です」

「質問の意図が分からんな。私はずっとこの拳銃を使っていた筈だが」

「その気持ち分かるぜえ、ティオすけ。あの凄まじいクラフトを見た後じゃあなあ」

「……何が言いたい」

「ええ。魔獣の急所を容赦無く撃ち抜く拳銃さばきも流石ですが、それ以上に」

「拳の破壊力が半端ねえ、と」

「……」

「モノが大型軍用拳銃だし、そっちが致命傷になんのは分かるんだけどなあ」

「素手の方が遥かに殺傷力が高いとは、どついう原理でしょうか」

「実はその手、特殊合金製の義手だとか！」

「……オルランド、プラトー」

「お、兄さんもしかして凶星？」

「そんな訳があるかこの馬鹿者！ お前達がそんなだから、あの子供が無礼な口を利くようになるのだ！ そんなに知りたかったら存分に味わわせてやる！ 二人揃ってそこに直れ！」

「うお、やべえ！ 逃げるぞティオすけ！」

「了解ですランディさん」

「待たんか！」

その拳の半分は、愛と正義で出来ています

『鐘』

「やはり、鐘楼の辺りから例の波動を感じます」

「上位の属性も発現してるみたいだね」

「そ、それって」

「僧院内に、またあの化け物がうろついている可能性があるのか」

「厄介ですね。どうします？」

「今は少し薬とかが心許ないからな。一旦装備を整えて出直そう」

「だってよ、お嬢。良かったな！」

「な、何のことかしら？」

「今あからさまにほつとしてたよね」

「そんなことはありません！」

「ワジ君、あんまり茶化さないの」

「——あ」

「どうした、ティオ？」

「いま、なにか——」

「お嬢後ろだ！」

「いやああっ！」

「わ」「ひゅう」「エ、エリイ？」

「ナイスですランディさん」

「おう。任せとけティオすけ」

「先輩！ ティオちゃん！」

「君も相変わらず役得だねえ」

「ワジ、混ぜっ返すな。エリイ、落ち着いて」

「ご、ごめんなさい」

「お嬢もいい加減慣れないとなあ。毎回ロイドに抱きつきたいなら

話は別だけどよ」

「ひゅーひゅーです」

「二人とも——い・い・加・減・に・し・な・さ・い！」

（相変わらず凄い迫力）

（あれでお化けが怖いなんて、冗談だよね？）

（あ、あはは……）

こうしていたら、少しは平気

『紅』

「テスト・ロッサ（赤い頭）に、ベルゼルガー（狂戦士）か……」

「どうしたんだい、ロイド」

「いや……シャーリイの武器も、ランディのライフルも、一族を示す名前を冠しているんだな、と思って」

「そうだねえ。化け物じみた戦闘力はともかく、あの髪は確かにオerland一族特有の遺伝だろうね。それで 赤い星座なんて、ハッキリ過ぎだけど」

「“蠍の心臓”か……」

「少しは調べたみたいだね、猟兵团のこと」

「一課での研修中に、資料は読んだよ。……でも、それだけだ」

「他にも思うところがありそうな顔だけど？」

「……本当に、大したことじゃない。…… 赤い星座 の猟兵は、ずっと昔から、あの色に付き従って、あの色を追いかけて来たのかと、思ってた」

「それってなんだか、嫉妬してるみたいだよ？」

「ああ…… そうなのかもしれない」

「へえ？ 随分入れ込んでるじゃない」

「彼らのした事は許せないし、ビジネスとしての戦争なんて理解できない…… したくもない。だけど、一つだけ——あの色を、頼もしく思う気持ちだけは、解る気がするんだ」

「…… フフ、彼が聞いたらどんな顔するだろうね」

あの背中で弾む紅に
絶対の信頼を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5363z/>

【零の軌跡 / 碧の軌跡】漢字1文字×5つのお題

2011年12月18日09時52分発行